

## 空手道詳説（32）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

##### （4）敗戦後の琉球

##### ⑨ 江戸上り

1609年5月、囚われの身になった尚寧王は、翌年、薩摩藩主の島津家久（忠常）とともに2代将軍徳川秀忠と謁見するため江戸に向かい、途中駿府で徳川家康にお目通りし、続いて江戸に至って登城し、家久はその場で秀忠から琉球の支配権を承認された。これ即ち、幕藩体制下において薩摩に従属することを意味し、尚氏各代の王は、将軍に対し琉球王の即位による諸恩使（新王の即位は薩摩の承認を要した）や、新將軍の着位ごとに慶賀使を派遣する義務を負い、それらを江戸上り（えどのぼり）と言った。

江戸上りに当たっては、薩摩が参勤交代を兼ねて同行し、琉球使節団には中国風の服装を着衣させ、あたかも異国を支配しているかの如き印象を強調した。

江戸上りが実際に開始されたのは1639年で、謝恩使、慶賀使を合せ明治維新前まで18回に及び、使節団は約100名、正使を務めるのは王子（王族の一員）に限られた。

旅程は、6月頃に琉球を出て薩摩山川港に入り、鹿児島にしばらく滞在した後、長崎経由で下関から乗船して瀬戸内海を渡り、大阪から京都を経て東海道を下り、江戸に入るのが11月頃であった。任務を果たした後は、往路と逆のコースで帰路に着くが、往復4000キロの行程であり、ほぼ1年掛りの長丁場であった。



1832年（天保3年）の江戸上りの様子を画いた錦絵「琉球人行列彩色」

##### ⑩ 薩摩藩の借財解消

薩摩藩は、豊臣秀吉の命による朝鮮出兵、関ヶ原の戦い、九州における反勢力制圧の争いと鎮圧などにより、膨大な借金を抱えていたことは前に述べた。その困窮の最中に琉球侵攻が行われている。

井沢元彦著「日本史集中講座」283 頁によれば、『(前文略)、諸藩はどんどん困窮していきます。たとえば薩摩藩などは、一番ひどいときは 500 万両の借金があったと言われていました。一石一両に換算すると、薩摩 73 万石は、年収 73 万両ということになります。その 73 万両は、参勤交代の費用や家臣に払う給料などを差し引くと、自由に使えるお金はほとんど残らないのが現実です。それでも仮にその 73 万両のうち何とかして 5 万両を返せたとしましょう。500 万両の借金に対して毎年 5 万両ずつ返済したとしても、それでは利息分にもならないのです。ところが薩摩は、この財政破綻状態を、殿様が代替わりした途端、わずか一代で一気に回復させているのです。なぜそのようなことができたのかというと、琉球を利用して密貿易をおこなったからです。武家社会というのは、実際にはどこも財政破綻していたのです。そして、幕府だけが直轄の金銀山があったり、貨幣改鋳などでごまかしていたのですが、諸藩はいやおうなしに藩政改革をやらざるを得なかったということです。』と記載されている。

殿様の代替わりとは、1638 年に島津家久が没し、家久の嫡男島津光久 (1516～95 年) が第二代藩主となったもので、光久は隠居する 1687 年まで 49 年間藩主の座にあった。「日本史集中講座」はその間の琉球支配による政策と収奪の結果を語る。

例えば、日本一の貧乏藩といわれ、一時は藩籍返上まで真剣に考えた米沢上杉藩 12 万石は、かの有名な第 9 代藩主上杉治憲 (1751～1822 年、鷹山は 1802 年剃髪後の号) の財政改革によって窮地凌ぐことできたと伝わるが、その上杉藩の借財はピーク時でも 20 万両余だったから、薩摩藩の借財はいかに桁はずれだったかが分かる。



島津光久の狩姿絵図



上杉治憲 (鷹山) 肖像絵図

## ⑪ 薩摩への 貢租と専売制導入

掟十五条の 8 項目に、「年貢、その他の貢物は、薩摩の奉行が定めたとおりに取納しなければならない。」とある。1611 年 (慶長 16 年) には琉球全土の検地を完了し、領内から産出する米の総高を 8 万 9 千石余 (検地結果に変化があれば変わる) とし、年

貢米の義務を負わせた。年貢米は、年を追うごとに付加的な諸費用を加算されて割合は膨らみ、薩摩への貢納は雑穀も合わせ琉球の総石高の30%（「沖縄の歴史」96頁）に達した。薩摩侵攻前は、収穫された農作物を王府に納め、残りをもって自給が可能とされていた民たちにとって、生命維持に多大な打撃を受ける羽目に至った。その結果、国内の食糧（米）不足解消のため、薩摩の商人から逆輸入米を購入せざるを得ない状況になり、王府は薩摩から米購入に伴う借金を重ねるようになってしまった。

しかし、時勢は悲運ばかりではなかった。『捨てる神あれば、また拾う神あり』の譬どおり、琉球に思いもよらず「拾いの神」が現れた。それは、サツマイモ、サトウキビ（甘蔗）、そしてウコン（鬱金）の生産であった。

サツマイモ（蕃薯、甘藷）は、北谷間切野国村（現在の中頭郡嘉手納町）住人の野国総管（生年不詳～1615年、総管は進貢船乗組員の役職名）が1605年福州から苗を持ち帰ったのが最初で、栽培が容易で繁殖力が強く、主食にも適する特性を有していた。栽培を全土に広めたのは「琉球五偉人」と称えられた中の一人、儀間真常（1557～1644年）が危急の時に命をつなぐ大切な食料として奨励した。サツマイモを琉球では唐薯（からいも、とういも）と言ひ、薩摩では琉球薯と呼ぶ。

サトウキビ（甘蔗）はイネ科サトウキビ属の他年生で、栽培種の起源はニューギニア島近辺と推定されている。紀元前6000年頃インドに渡り、その後東南アジアに広まった。茎の節間に糖分を含んだ髓があり、搾った汁を精製し砂糖を作る。植付けから収穫まで、ほとんど人手が掛らない利点がある。サトウキビ栽培の最初は奄美大島の直川智（すなおかわち）で、琉球に向かう途中台風に遭って福建に漂着、そこでサトウキビの栽培と製糖法を学び1610年に苗を帰ったという伝承もあるが、琉球に栽培を広めたのは前出の儀間真常で、1623年領民を福建に派遣して育苗と製糖法を学ばせ、苗を持ち帰らせて広まった。奄美大島の製糖成功の噂が、派遣につながった可能性もある。琉球言葉でウージと呼んだ。

儀間真常は他にも尚寧王とともに薩摩に連行されており、帰国に際し綿花の種を持ち帰り栽培を奨励し、「琉球絍」の基を築くなど数多産業興隆への功績は大きい。

もう一つはウコンであった。ウコンはショウガ科ウコン属の多年草で、インドが原産地である。英語名はターメリックで、薬用、料理の色付け、香辛料、染料など、他にも用途は巾広く、暖地で良く育つ。東南アジアとの貿易により、琉球に鬱金が伝わったのは明との国交開始（1372年）より前と推測される。琉球言葉はウッチンである。ウコンは大阪市場で高値で取引されていた。寒地の山形県でも栽培を見かける。

薩摩への年貢米の代納品として黒糖が使われたが、黒糖60kgに対しおおよそ米1俵前後の勘定だったから、それぞれ同重量が相場であった。

この代納だけでなく、余剰分は薩摩の買い上げもあったから、薩摩は琉球から得た黒糖を大阪市場で売却し、米代納対価の2倍～3倍の値で売りさばくことできた。



琉球王府は、薩摩からの借財が年々嵩み返済に汲汲とする中、薩摩からの内命もあって1645年から砂糖とウコンの専売制を施行した。両品目ともに、当時の日本では得難い貴重品である。

専売制（Government monopoly）とは、国などが財政収入を増やすため、特定物質の生産、流通、販売などを全面的に規制し管理下に置くことで、発生する利潤を独占できる制度である。日本の場合なら、「たばこ」が1985年（昭和60年）まで、塩が1997年（平成9年）まで専売制であったことを思い出してほしい。

琉球における砂糖などの専売制導入は、生産と出荷のコントロールによって大阪市場における相場の維持に主眼が置かれた。王府は薩摩に米の代納品、又は買い上げ品として売り渡し、薩摩はこれを大阪市場で売りさばき、共に利を挙げることできた。王府が農民（生産者）から納めさせた余剰分は私売を許可したが、豊凶に拘わらず一定量納入の義務を負う農民は、台風の襲来をおそれたに相違ない。

薩摩に割譲となった奄美諸島では、苛酷な増産強要により一揆まで起きるが、琉球では増産によるトラブルはなかった。

この砂糖、鬱金二品目の専売制度導入により、琉球は薩摩からの借財を短期間の内に完済できたし、同様に、薩摩も膨大な借財を清算し得たことは前項で述べたとおりである。



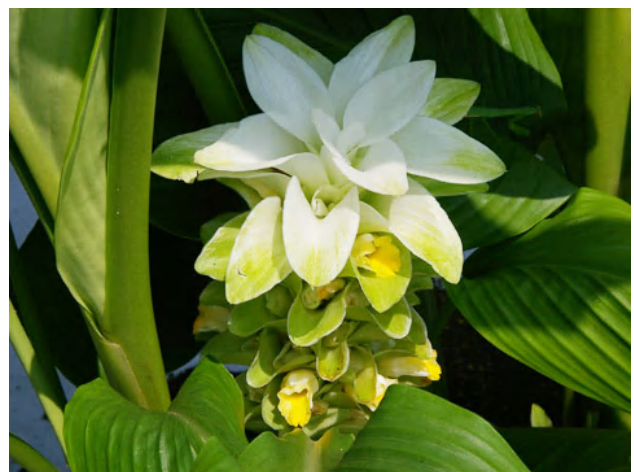
サトウキビの収穫作業



収穫された茎の束



ウコンの根と粉末



ウコンの花と葉

琉球史の中で、薩摩の侵攻による一大事変は、記述するに辛い大きな山場であった。

琉球国（後に沖縄県）は、その後も明治維新の「琉球処分」による王国解体、更に、太平洋戦争時には唯一地上激戦地となった沖縄戦（ウチナーいくさ）を経て、敗戦後の占領時代からアメリカ合衆国の施政権下へと移り、1972年（昭和47年）の「沖縄復帰」後も諸々の問題抱えながら今に至り、絶えず激動のうねりに翻弄される運命を背負い続けている。

（つづく）

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行